

「をちこち散歩」は2人の筆者が6回連載します。

アカ族の兄

なかがみ
中上 紀

作家

タ

イ北部のチェンライという町で、山岳民族のアカ族の青年と友達になった。市内の博物館を訪れた際に彼が説明をしてくれたのがそもそも始まりだったのだが、ともすればそれだけの出会いに終わってしまいそうなる、別れ際に彼が口にした、僕たちは兄妹のようなものだ、という言葉が心に残り、ふと思いついて日本から手紙と写真を送ったのである。

二年後に再訪したとき、彼がガイドする、アカ族やカレン族、リス族などの山岳民族の村へのトレッキングツアーに参加した。泊まったのは彼の親戚だというアカ族の伝統的な家で、アカ族も日本人も欧米人も、言葉が通じる者も通

じない者も、同じ屋根の下に寝、同じ釜の飯を食べ、酒を飲み交わし、思い出深い時間を過ごした。

兄と妹。その言葉の意味するところは、国籍や言語を超えたつながりのことだ。山奥の村で生活してきたアカ族にとっては、タイという国に住んではいるものの、タイ語は外国語のようなものである。もともと、近年はタイ語で学校教育が行われるので若者たちのほとんどが話すことが出来るが、年配の人々にとっては、タイ語も英語も同じ異質な言葉なのだ。

私より少し年上である友人は、町に出てきてから英語を独学で習得したらしく、かなり流暢だった。おかげで我々は会話が出来たのだが、この広い地球に住む人間同士

がこうして心を伝え合うことが出来るのが嬉しいと彼は言った。

彼が見ているのは、国境でも、言語でもない。その眼に映っている世界は、そんな些細な差異とは別の次元にある。彼が育ったような少数民族の小さな村は、タイ北部からミャンマーにかけて無数に存在するが、山の中には国境線などない。彼にとって町に出てくるということは、タイ社会にということよりは、むしろ世界に飛び込むという意味に近かったのではあるまいか。

アカ族には文字がない。だからアルファベットで僕の名前を書くしかない。そう言った「兄」のサインが、古いメモ用紙にまだ残っている。☺